

多価 semi-entire modular form について

学習院大理 大田 浩 (Hiroshi Ohta)

一般に modular group の有限指数をもつ subgroup における modular form に対して, その自身を根にもつような, modular group における modular form を係数とするような多項式を作ることができる。このとき, 係数の modular form は, weight に関してある種の条件を満たす。逆に, この条件を満たすような modular form を係数とする多項式を考えれば, この多項式から得られる (解析) 関数は modular form と類似した性質をもつ。

以下に述べる “多価 semi-entire modular form” の話しは, 上記のことにヒントを得て展開したものである。ここで一言断わっておけば, 一般の modular form, さらに保型形式において話しを進めなかったのは, 単に私自身の怠慢とゆえからである。また, “many-valued modular form” という言葉は, Eichler, Zagier [2], [3] において見られるが, その

定義などを記した文献を見つけることができなかったので、私自身が都合のよいように勝手に定義を与えてしまったが、すでに同じような、あるいは別の定義があるかもしれない。

記号

$$\Gamma \stackrel{\text{put}}{=} SL(2, \mathbb{Z})$$

$$S\tau \stackrel{\text{def}}{=} (a\tau + b)/(c\tau + d), \quad S:\tau \stackrel{\text{def}}{=} c\tau + d \quad (S = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in \Gamma)$$

\mathcal{H} : 上半平面 \mathcal{F} : Γ の基本領域

$\gamma: \tau_0 \rightsquigarrow \tau_1 \stackrel{\text{def}}{\iff} \gamma$ は τ_0 と τ_1 を結ぶ連続曲線

$f \underset{m}{\overset{\gamma}{\rightsquigarrow}} g \stackrel{\text{def}}{\iff} f$ と g は γ に沿って解析接続可能

$f \underset{m}{\overset{\mathcal{H}}{\rightsquigarrow}} g \stackrel{\text{def}}{\iff} f$ と g は \mathcal{H} 上解析接続可能

f が τ_0 ($\in \mathcal{H}$) の近傍 ($\subset \mathcal{H}$) で定義された函数のとき、

$$(f|_m S)(\tau) \stackrel{\text{def}}{=} (S:\tau)^{-m} f(S\tau) \quad (m \in \mathbb{Z}, S \in \Gamma)$$

によって、 $S\tau_0$ の近傍で定義された函数 $f|_m S$ を定める。

また、 \mathcal{H} 上の解析函数とは、 \mathcal{H} 上可能な限り解析接続した最っとも極大な解析函数を意味する。さらに、この解析函数の分枝とは、適当な領域における正則函数で、その正則函数を \mathcal{H} 上解析接続するともとの解析函数となるものと言う。

§ 1 多価 semi-entire modular form の定義

以後, $k \in \mathbb{Z}$, Γ_1 は指数有限な Γ の subgroup とする。

定義 \mathcal{H} 上の多価函数 g (真に多価でなくともよい) が次の条件 (I)~(III) を満たすとき, Γ_1 に対する weight k の多価 semi-entire modular form であると呼ぶことにする。

(I) g は \mathcal{H} 上に分岐点以外の特異点をもたない, \mathcal{H} 上の解析函数であり, $R = \overline{\text{pr}} \{ \tau : g \text{ の分岐点} \}$ とおくとき,

$$\#(\mathcal{H} \cap \Gamma R) < \infty$$

かつ, $R \ni \forall \tau$ は g の極でも真性特異点でもない。

(II) (g の保型性) $g_i \in g$ の1つの分枝とするとき,

$$g_i|_k S \xrightarrow{\text{pr}} g_i \quad (\text{for } \forall S \in \Gamma_1).$$

(III) $\mathbb{Q} \cup \{i\infty\} \ni \forall \tau$ ($S\tau = i\infty, S \in \Gamma$) に対し \mathcal{U} , τ の十分小さい $\varepsilon (> 0)$ 近傍 $\mathcal{U}_{\varepsilon, \tau} \stackrel{\text{def}}{=} \{ \tau \in \mathcal{H} \mid \text{Im } S\tau > \frac{1}{\varepsilon} \}$ で g の任意の分枝 g_j は次のように表わされる。

$$(S: \tau)^k g_j(\tau) = C_{\tau}^* S\tau + \sum_{\nu \geq 0} C_{\nu}^{(\tau)} e^{\frac{2\pi i \nu}{k} S\tau \cdot \nu}$$

$$(C_{\tau}^*, C_{\nu}^{(\tau)} \in \mathbb{C}, K (> 0) \in \mathbb{Z})$$

特に g が m 価のとき, $g \in m$ 価 semi-entire modular form, (III) においてつねに $C_0^{(\tau)} = 0$ となるとき, $g \in$ 多価 semi-cusp form, また, $\exists C_{\tau}^* \neq 0$ のとき, g は対数特異点をもつという。

さらに, $R \ni \forall \tau$ に対し

- ① τ は g の対数分岐点でない
- ② g の τ における任意の代数要素 g_τ に対して,

$$\text{ord}_\tau(g_\tau) \geq 1$$

を満たすとき, g は多価 entire modular form であるという。

g を有限多価 semi-entire modular form とすれば, g は対数特異点をもたない (i.e. $\forall C \neq 0$)。従って,

g : entire modular form

$\Leftrightarrow g$: 1 価 semi-entire modular form

となるので, 多価 semi-entire modular form は entire modular form の定義の拡張となっている。

定義 $\mathbb{Z} \ni n (> 0)$ とする。

$$\begin{cases} F(X, \tau) = X^n + a_1(\tau)X^{n-1} + \dots + a_n(\tau) \\ a_i \text{ は weight } k_i \text{ の } \Gamma \text{ に対する entire modular form} \end{cases}$$

なる X の多項式を, degree n , weight k の entire modular form 多項式と呼ぶ。このとき, $F(g(\tau), \tau) = 0$ (for $\forall \tau \in \mathcal{F}_\Gamma$) を満たす \mathcal{F}_Γ 上の解析関数 g が存在するが, 特にこの $g \in (F \text{ から定義される})$ weight k の代数型 entire modular form という。entire modular form のところをすべて, cusp-form におきかえて, 同様に cusp-form 多項式, 代数型 cusp-form を定義

する。

$l (\geq 3) \in \mathbb{Z}$ とするとき, G_l で weight l の Γ の Eisenstein 級数 i.e. $G_l(\tau) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{\mathbb{Z}^2 \ni (m_1, m_2) \neq (0,0)} (m_1\tau + m_2)^{-l}$ を表す。 $\{G_4^i G_6^j \mid 4i + 6j = l, i, j (\geq 0) \in \mathbb{Z}\}$ は, weight l の Γ の entire modular form 全体のなす \mathbb{C} -vector space の basis となる。また, G_4, G_6 は \mathbb{C} 上代数的に独立である。このことより,

$F(X, \tau)$: weight k の entire modular form 多項式

$\Leftrightarrow F(X, \tau) \in \mathbb{C}[G_4, G_6][X]$, monic かつ, X, G_4, G_6

に weight を $k, 4, 6$ の割り合でつけたとき同次式

が得られる。

また, g を $\tau_0 (\in \mathcal{H})$ の近傍 ($\subset \mathcal{H}$) での函数で, $F(g(\tau), \tau) = 0$ (for $\forall \tau \in \tau_0$ の近傍) を満たすとするは容易に $F((g|_k S)(\tau), \tau) = 0$ (for $\forall \tau \in S^{-1}\tau_0$ の近傍 ($\subset \mathcal{H}$)) を $\forall S \in \Gamma$ に対して満たすこともわかる。

$F(X, \tau)$ の X の多項式としての判別式を $D(F)(\tau)$ とする。

$D(F)(\tau)$ は weight $k(m-1)$ の Γ に対する entire modular form ($m = \deg_X F, k = \text{weight } F$) となる。

定義 g を (I) の条件を満たす函数とする。このとき, g の

1つの分枝 g_0 をとり

$$\Gamma_k(g) \stackrel{\text{def.}}{=} \{ S \in \Gamma \mid g_0|_k S \xrightarrow{\mathcal{H}} g_0 \}$$

と定義する。 $\Gamma_k(g)$ は g の分枝 g_0 のとり方によらない、 Γ の subgroup となる。

$$(注) \quad \Gamma_k(g) = \left\{ S \in \Gamma \left| \begin{array}{l} \mathcal{H} \setminus \Gamma R \ni \forall \tau_0, \forall g_i: \tau_0 \text{ における } g \text{ の分枝} \\ \mathcal{H} \setminus \Gamma R \supset \forall \gamma: S^{-1}\tau_0 \xrightarrow{\sim} \tau_i \quad (\tau_i \in \mathcal{H}) \\ \exists g_j: g \text{ の分枝 s.t. } g_i|_k S \xrightarrow{\gamma} g_j \end{array} \right. \right\}.$$

定理 1 $k(\geq 0) \in \mathbb{Z}$ とするとき、次の (i), (ii) は同値である。

(i) g は weight k の Γ_1 の有限多価 semi-entire modular form
($\exists \Gamma_1$: subgroup of Γ)

(ii) g は F から定まる weight k の代数型 entire modular form
($\exists F$: weight k の entire modular form 多項式)

(証明の方針)

(i) \Rightarrow (ii) $g \in m$ 価とし、 $\Gamma_0 \stackrel{\text{put}}{=} \Gamma_k(g) (\supset \Gamma_1)$, $l \stackrel{\text{put}}{=} (\Gamma: \Gamma_0)$,
 $\Gamma = \bigcup_{j=1}^l \Gamma_0 S_j$ ($S_j \in \Gamma$) とする。 $\mathcal{H} \setminus \Gamma R \ni \tau_0$ をとり、 $S_j \tau_0$
における g の m 個の分枝を、 g_{1j}, \dots, g_{mj} とする。さらに、
 $f_{ij} \stackrel{\text{put}}{=} g_{ij}|_k S_j$ とする。この f_{ij} をつかい

$$F(X, \tau) \stackrel{\text{put}}{=} \prod_{\substack{1 \leq i \leq m \\ 1 \leq j \leq l}} (X - f_{ij}(\tau))$$

を作り、各係数を \mathbb{C} 上に解析接続すれば、 F が求まる多項式となる。特に

$$f_{ij} \equiv f_{i'j'} \Leftrightarrow (i, j) = (i', j')$$

には意す山は, F が $\mathbb{C}[G_4, G_6][X]$ 上既約であることを得る。

ii) \Rightarrow i) $F_0 \in F$ の $\mathbb{C}[G_4, G_6][X]$ における既約因子 g を定義するものとする山は, $(\Gamma: \Gamma_k(g)) \mid \deg_x F_0$ が山かり, g が $\Gamma_k(g)$ の weight k の $\deg_x F_0 / (\Gamma: \Gamma_k(g))$ 個の semi-entire modular form となることが示す山る。 //

定理 1 より容易に次のことが導びか山る。

系 2 F を weight k の entire modular form 多項式で, 任意の $\tau \in \mathcal{H}$ に対して $D(F)(\tau) \neq 0$ とする。このとき, \mathcal{H} 上の連続函数 g で $F(g(\tau), \tau) = 0$ を満たすものをと山は (このようなものは必ず存在する), 任意の $S \in \mathcal{T}$ に対して $g|_k S$ は $S \Gamma_k(g) S$ の weight k の entire modular form となり, 特に次が成立する。

$$F: \text{irred. in } \mathbb{C}[G_4, G_6][X] \Leftrightarrow (\Gamma: \Gamma_k(g)) = \deg_x F$$

(注) 定理 1, 系 2 は, cusp-form についても成立する。

§ 2 多価 semi-entire modular form の例

$\omega_1/\omega_2 \in \mathcal{H}$ とするとき, $\wp(z, (\omega_1/\omega_2)), \wp'(z, (\omega_1/\omega_2))$ によ, τ

ω_1, ω_2 を周期とする Weierstrass の \wp -函数, σ -函数を表すことにする。

$$\begin{aligned} \text{i.e. } \wp(z, (\omega_1, \omega_2)) &= \frac{1}{z^2} + \sum_{\substack{\mathbb{Z}\omega_1 \oplus \mathbb{Z}\omega_2 \ni \omega (\neq 0)}} \left\{ \frac{1}{(z-\omega)^2} - \frac{1}{\omega^2} \right\} \\ \sigma(z, (\omega_1, \omega_2)) &= z \prod_{\substack{\mathbb{Z}\omega_1 \oplus \mathbb{Z}\omega_2 \ni \omega (\neq 0)}} \left(1 - \frac{z}{\omega} \right) e^{\frac{z}{\omega} + \frac{z^2}{2\omega^2}}. \end{aligned}$$

特に $\tau \in \mathcal{H}$ のとき

$$\wp(z, \tau) \stackrel{\text{def}}{=} \wp(z, (\tau)), \quad \sigma(z, \tau) \stackrel{\text{def}}{=} \sigma(z, (\tau)),$$

とする。

$N (\neq 0) \in \mathbb{Z}$ に対し

$$\begin{aligned} \Lambda_N(z, \tau) &\stackrel{\text{def}}{=} \sigma^2(Nz, \tau) / \sigma^{2N^2}(z, \tau) \\ \Phi_N(z, \tau) &\stackrel{\text{def}}{=} \wp(Nz, \tau) \Lambda_N(z, \tau) \end{aligned}$$

と定義する。このとき

$$\Lambda_N(z, \tau), \Phi_N(z, \tau) \in \mathbb{Z}[15G_4(\tau), 35G_6(\tau)][\wp(z, \tau)]$$

となる。従って

$$\exists! \lambda_N(X, \tau), \exists! \phi_N(X, \tau) \in \mathbb{Z}[15G_4(\tau), 35G_6(\tau)][X]$$

$$\text{s.t. } \lambda_N(\wp(z, \tau), \tau) = \Lambda_N(z, \tau), \quad \phi_N(\wp(z, \tau), \tau) = \Phi_N(z, \tau).$$

特に $\frac{1}{N^2} \lambda_N, \phi_N$ はそれぞれ degree $N^2 - 1$, N^2 の weight 2 の entire modular form 多項式となる (cf Cassels [1]).

$\mathcal{H} \ni \tau$ とするとき, $\lambda_N(X, \tau) = 0$ の根は

$$\left\{ \wp\left(\frac{a\tau+b}{N}, \tau\right) \mid \mathbb{Z}^2 \ni (a, b) (\neq (0, 0)) \bmod N \right\}$$

$\phi_N(X, \tau) = 0$ の根は, $\wp(\alpha\tau + \beta, \tau) = 0$ ($\alpha, \beta \in \mathbb{R}$) とす場合は

$$\left\{ \wp\left(\frac{(\alpha+a)\tau + (\beta+b)}{N}, \tau\right) \mid \mathbb{Z}^2 \ni (a, b) \bmod N \right\}$$

となる。

以後, $N > 1$ とする。

$$f_{N, (a)}(\tau) = \sum_{\substack{c \in \mathbb{Z} \\ c \equiv a \pmod{N}}} f\left(\frac{a\tau + b}{N}, \tau\right) \quad (\mathbb{Z}^2 \ni (a, b) (\neq (0, 0)) \pmod{N})$$

とする。 $f_{N, (a)}$ は $\frac{1}{N^2} \lambda_N$ から定義される weight 2 の 1 価代数型 entire modular form となることが, $f_{N, (a)}$ のつくり方よりわかるので, weight 2 の entire modular form となる (cf. § 1)。
 山山山山は, この $f_{N, (a)}$ を N^{th} β -division value と呼んでいる。この函数は, 頂度 β -函数にその極の等分点を代入したものである。そこで, ϕ_N から定義される weight 2 の代数型 entire modular form が頂度 β -函数にその零点の等分点を代入して得られることから, N^{th} β -zero division value と呼び \mathfrak{F}_N で表わすことにする (今のところ ϕ_N から定義される \mathcal{H} 上の解析函数 i.e. 代数型 entire modular form が何個あるかわからないが, \mathfrak{F}_N とかけば, そのうちの 1 つを意味するものとする)。

$\lambda_2(X, \tau) = 4X^3 - 60G_4(\tau)X - 140G_6(\tau)$ より, $\mathcal{H} \ni \tau_0$ とし, $f(\alpha\tau_0 + \beta, \tau_0) = 0$ ($\alpha, \beta \in \mathbb{R}$) とすれば

$$\tau_0 \in \Gamma F \Leftrightarrow 2\alpha, 2\beta \in \mathbb{Z}$$

がわかる。これより

$$\tau \in \Gamma F \Leftrightarrow D(\phi_N)(\tau) = 0.$$

従って, $\{\tau: \mathfrak{F}_N \text{ の分岐点}\} \subset \Gamma F$ となる。特に $\Gamma F \ni \tilde{\tau}$ にお

い2

$$\phi_N(X, \tilde{\tau}) = \begin{cases} X \prod_{i=1}^{\lfloor \frac{N}{2} \rfloor} (X - \alpha_i)^2 & (N: \text{odd}) \\ \prod_{i=1}^{\lfloor \frac{N}{2} \rfloor} (X - \alpha_i)^2 & (N: \text{even}) \end{cases}$$

($\alpha_i \neq 0, \alpha_i \neq \alpha_j \ (i \neq j)$)

となるので、 \mathfrak{f}_N の $\tilde{\tau}$ における分岐度は高々1である。 $N=2$ の場合を考える。 \mathfrak{f}_2 を \mathfrak{o}_2 の $\tilde{\tau}$ における代数要素(一般に ϕ_N の $\tilde{\tau}$ における様子から、 $\tilde{\tau}$ の近傍において \mathfrak{f}_N は極要素をもたないことがわかる)とする。 \mathfrak{f}_2 は Puiseux 級数によって

$$\mathfrak{f}_2(\tau) = c_0 + c_1(\tau - \tilde{\tau})^{d_1} + c_2(\tau - \tilde{\tau})^{d_2} + \dots$$

$$\frac{1}{2}\mathbb{Z} \ni d_i (> 0), \quad d_i < d_j \ (i < j), \quad c_0 \neq 0$$

と表わされる。 $\tilde{\tau}$ の近傍において、 $\phi_2(\mathfrak{f}_2(\tau), \tau) = 0$ を満たすことに注意して、 $\phi_2(X, \tau) = (X^2 + 15G_4(\tau))^2 + 280G_6(\tau)X$ に代入することにより、 $d_1 = \frac{1}{2}$ を得る。故に \mathfrak{f}_2 は ΓF で分岐する。

\mathcal{O} 上の解析函数 u で、 $\wp(u(\tau), \tau) = 0$ を満たすものが存在する。このような u を1つ固定する。

次の命題は、Eichler, Zagier [2] の中に見られるが、その厳密な証明は記されていない。

命題3 (1) $\{\tilde{\tau}: u \text{ の分岐点}\} = \Gamma F$

(2) $\Gamma \mathbb{F} \ni \tilde{c}$, $U_0 \in \tilde{c}$ の近傍における U の分枝とし

$$\lim_{\tau \rightarrow \tilde{c}} U_0(\tau) = \frac{l_1}{2} \tilde{c} + \frac{l_2}{2} \quad (l_1, l_2 \in \mathbb{R})$$

($U_0(\tau)$ は連続関数として \tilde{c} までは延長できるので, $\lim_{\tau \rightarrow \tilde{c}} U_0(\tau)$ を以後単に $U_0(\tilde{c})$ で表わす) と表わしておく。このとき,

$$\Gamma[2] \stackrel{\text{par}}{=} \left\{ S \in \Gamma \mid S \equiv \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \pmod{2} \right\} \text{ とすれば}$$

$$\Gamma[2] \mathbb{F} \ni \tilde{c} \Leftrightarrow l_1, l_2: \text{odd}$$

$$\Gamma[2](\mathbb{F}+1) \ni \tilde{c} \Leftrightarrow l_1: \text{odd}, l_2: \text{even}$$

$$\Gamma[2] \frac{\mathbb{F}+1}{2} \ni \tilde{c} \Leftrightarrow l_1: \text{even}, l_2: \text{odd}$$

であり, 変数 τ が \tilde{c} をしまわりすると $U_0(\tau)$ は $-U_0(\tau) + l_1\tau + l_2$ にうつる。従って, \tilde{c} は U の分岐度 1 の代数特異点である。

(証明の方針)

(1) $\{\tilde{c}: U \text{ の分岐点}\} \subset \Gamma \mathbb{F}$ は明らかである。そこで, U_0 がある $\tilde{c} \in \Gamma \mathbb{F}$ で分岐しないとする。 $\phi_2(X, \tau) = 0$ の \tilde{c} の近傍における根は, $\wp\left(\frac{U_0(\tau)}{2}, \tau\right)$, $\wp\left(\frac{U_0(\tau)+\tau}{2}, \tau\right)$, $\wp\left(\frac{U_0(\tau)+1}{2}, \tau\right)$, $\wp\left(\frac{U_0(\tau)+\tau+1}{2}, \tau\right)$ と表わされる。 U_0 が \tilde{c} で分岐しないことより, これは \tilde{c} で分岐しない。これは \wp_2 が \tilde{c} で分岐することに矛盾する。

(2) 前半は省略する。後半は, $\wp\left(\frac{U_0(\tau)+a\tau+b}{N}, \tau\right)$ ($a, b \in \mathbb{Z}$) が \wp_N の分枝となることと, 任意の odd $N \geq 3$ に対して, 必ず $\phi_N(X, \tilde{c})$ が単根をもつこと, さらに (1) より U_0 が \tilde{c} で分岐することより導びく。 //

0 は \wp -函数の極であるから, $u(\tilde{\tau}) \neq 0$ (for $\forall \tilde{\tau} \in \Gamma \backslash \mathcal{H}$) である (このことは (2) からわかる)。従って, u は $\Gamma \backslash \mathcal{H}$ で極要素をもたない。さて, $u_0 \in \mathcal{H} \setminus \Gamma \backslash \mathcal{H} \ni \tau_0$ における u の分枝とすれば, $S^{-1}\tau_0$ ($S \in \Gamma$) の近傍において

$$\begin{aligned} 0 &= \wp(u_0(S\tau), S\tau) = \wp(u_0(S\tau), \frac{1}{S:\tau} S(\tau)) \\ &= (S:\tau)^2 \wp((S:\tau)u_0(S\tau), S(\tau)) \\ &= (S:\tau)^2 \wp((u_0 \circ S)(\tau), \tau) \end{aligned}$$

となるから, u は $\Gamma^{-1}(u)$ の weight -1 の多価 semi-entire modular form となるのではないかという期待がもたれる。以後このことを示す方針を述べる。

まず, $\mathcal{A} = \{ \tilde{u} : \mathcal{H} \text{ 上の解析函数} \mid \wp(\tilde{u}(\tau), \tau) = 0 \}$ が有限集合ならば, $(\Gamma : \Gamma_1(u)) \leq \#\mathcal{A}$ となることを示す。実際 $M \geq \#\mathcal{A}$ とし, $(\Gamma : \Gamma_1(u)) > M$ とすれば

$$\exists S_1, \dots, S_{M+1} \in \Gamma \text{ s.t. } \Gamma_1(u)S_i \neq \Gamma_1(u)S_j \quad (i \neq j).$$

u_0 を上記と同様に $\mathcal{H} \setminus \Gamma \backslash \mathcal{H} \ni \tau_0$ における u の分枝とする。上の S_i を用いて, $\gamma_i : S_i^{-1}\tau_0 \rightarrow \tau_0$ ($\subset \mathcal{H} \setminus \Gamma \backslash \mathcal{H}$) なる連続曲線を決め, $u_0 \circ S_i \xrightarrow{\gamma_i} u_i$ とすると, 函数関係不変の原理より, τ_0 の近傍で $\wp(u_i(\tau), \tau) = 0$ を満たす。従って, 仮定より

$$\exists i, j \quad (i \neq j) \text{ s.t. } u_i \xrightarrow{\mathcal{R}} u_j.$$

よって, $u_0 \circ S_i \xrightarrow{\mathcal{R}} u_0 \circ S_j$ 。故に, $u_0 \circ S_i S_j^{-1} \xrightarrow{\mathcal{R}} u_0$ となり矛盾する。

補題4 $\wp(u(\tau), \tau) = 0$ なる \mathbb{H} 上の解析関数 u は無限多価.

かつ, $\#\Sigma = \#\{\tilde{u}: \mathbb{H} \text{ 上の解析関数} \mid \wp(\tilde{u}(\tau), \tau) = 0\} < \infty$.

特に, $(\Gamma: \Gamma^{-1}(u)) < \infty$ である.

(証明の方針) u_0 を \sqrt{N} の近傍における u の分枝とし, これを $\sqrt{N+1}$, $\frac{\sqrt{N+1}}{2}$ の近傍まで解析接続したものを同じ記号 u_0 で表わす。命題3より

$$u_0(\sqrt{N}) = \frac{l_1}{2}\sqrt{N} + \frac{l_2}{2} \quad (l_1, l_2: \text{odd})$$

$$u_0(\sqrt{N+1}) = \frac{m_1}{2}(\sqrt{N+1}) + \frac{m_2}{2} \quad (m_1: \text{odd}, m_2: \text{even})$$

$$u_0\left(\frac{\sqrt{N+1}}{2}\right) = \frac{m_1}{2}\left(\frac{\sqrt{N+1}}{2}\right) + \frac{m_2}{2} \quad (m_1: \text{even}, m_2: \text{odd})$$

と表わす。再び, 命題3より変数 τ が, \sqrt{N} , $\sqrt{N+1}$ を1まわりますれば, $u_0(\tau)$ は $u_0(\tau) + (m_1 - l_1)\tau + (m_2 - l_2)$ にうつることになる。同様に, \sqrt{N} , $\frac{\sqrt{N+1}}{2}$ を1まわりますれば, $u_0(\tau)$ は $u_0(\tau) + (m_1 - l_1)\tau + (m_2 - l_2)$ にうつる。ここで, $m_2 - l_2 \neq 0$, $m_1 - l_1 \neq 0$ となることに注意すれば, \sqrt{N} の近傍における Σ の元 \tilde{u} の任意の分枝は, $\pm u_0(\tau) + m\tau + m$ ($m, m \in \mathbb{Z}$) で与えられることより, $\#\Sigma < \infty$ となる。//

(注) $|m_1 - l_1|, |m_2 - l_2|, |m_1 - l_1|, |m_2 - l_2|$ は u および u_0 のとり方によらず \wp のみによって定まる数である。

定理5 $\wp(u(\tau), \tau) = 0$ を満たす \mathbb{H} 上の解析関数 u は, $\Gamma^{-1}(u)$ に対する weight -1 の無限多価 semi-entire modular form である。

(証明) $(\Gamma: \Gamma_1(N)) < \infty$ であり, 定義の(I), (II)についてはすでに示してある。(III)については, Eichler, Zagier [3] の Theorem 1.2, 3.6, 11.1 より, $\mathbb{Q} \cup \{\infty\} \ni \forall \tau$ に対して, U の上の近傍における任意の分枝 U_0 は

$$(S: \tau)^{-1} U_0(\tau) = C_1^* S\tau + \sum_{\nu \neq 0} C_\nu^{(k)} e^{2\pi i \nu S\tau \cdot \nu}$$

$$(C_1^* \in \mathbb{Z}, C_0^{(k)} \in \pm \frac{\log(5+2\sqrt{5})}{2\pi\sqrt{5}} + \frac{1}{2} + \mathbb{Z})$$

と表わされることがかかるのでよい。//

U の分岐点は $\sqrt{5}$ であるから, $\text{Im } \tau \geq 1$ で連続, $\text{Im } \tau > 1$ で正則となる U_1 で, $\wp(U_1(\tau), \tau) = 0$ なるものが存在する。上の証明中の cusp での展開式より

$$\exists C \in \mathbb{Z} \text{ s.t. } U_1(\tau+1) = U_1(\tau) + C \quad (\text{Im } \tau \geq 1).$$

そこで, $U_1(\sqrt{5}) = \frac{l_1}{2}\sqrt{5} + \frac{l_2}{2}$ とすれば

$$U_1(\sqrt{5}+1) = \frac{l_1}{2}(\sqrt{5}+1) + \frac{2C - l_1 + l_2}{2}$$

となることがかかる。また, $T = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$, $U = \begin{pmatrix} 1 & \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \in \Gamma$ とし

$U_2(\tau) \stackrel{\text{put}}{=} (U_1 \circ T)(\tau)$ とすれば, U_2 は $\text{Im } T\tau \geq 1$ で連続,

$\text{Im } T\tau > 1$ で正則な函数で, $\wp(U_2(\tau), \tau) = 0$ を満たす。

$$U_2(TU^{-1}T\tau) = \frac{1}{\tau+1} U_1(\tau) - \frac{C}{\tau+1} \tau$$

に注意すれば, $TU^{-1}T\sqrt{5} = \frac{\sqrt{5}+1}{2}$ より

$$U_2\left(\frac{\sqrt{5}+1}{2}\right) = \frac{l_1 + l_2 - 2C}{2} \frac{\sqrt{5}+1}{2} - \frac{l_1}{2}.$$

一方, $U_2(\sqrt{5}) = \sqrt{5} U_1(\sqrt{5}) = \frac{l_2}{2}\sqrt{5} - \frac{l_1}{2}$ 。従って, 補題4の証明

の方針と同様に考えれば, 変数 τ が, \sqrt{c} , $\sqrt{c+1}$ を 1 まわりすれば, $u_1(\tau)$ は $u_1(\tau) + 2c - l_1$ にうつり, \sqrt{c} , $\frac{\sqrt{c+1}}{2}$ を 1 まわりすれば, $u_2(\tau)$ は $u_2(\tau) - (2c - l_1)\tau$ にうつることを得る。

$$\left(\sqrt{c} \quad \sqrt{c+1} \right)$$

$$u_1(\tau) \mapsto u_1(\tau) + 2c - l_1$$

$$\left(\sqrt{c} \quad \frac{\sqrt{c+1}}{2} \right)$$

$$u_2(\tau) \mapsto u_2(\tau) - (2c - l_1)\tau$$

従, τ , u の分岐の様子を調べる方法として, c と l_1 の関係を調べる方法もある。先に注意したように, $|2c - l_1|$ は ρ のみによって定まる定数である。以上より, 次が得られる。

系 6 N が 2 以上の even, または $N > |2c - l_1|$ なる odd のとき, 任意の N^{th} ρ -zero division value \mathfrak{f}_N は, 真に有限多価な semi-entire modular form となる。

(証明の方針) N が even のとき, $\phi_N(X, \sqrt{c})$ は重根のみをもつことより明らか。 $N (\geq 3)$ を odd とする。上記の u_1 をつかえば, \mathfrak{f}_N の \sqrt{c} の近傍における任意の分枝は,

$$\rho \left(\frac{1}{N} (u_1(\tau) + a\tau + b), \tau \right) \quad (a, b \in \mathbb{Z})$$

と表わされる。変数 τ が \sqrt{c} を 1 まわりすれば, $u_1(\tau)$ が $-u_1(\tau) + l_1\tau + l_2$ にうつることより

$$(a, b) \equiv \left(\frac{l_1}{2}(N-1), \frac{l_2}{2}(N-1) \right) \pmod{N}$$

ならば, $\rho \left(\frac{1}{N} (u_1(\tau) + a\tau + b), \tau \right)$ は別のもの にうつることが

わかる。そこで, $(a, b) \equiv (\frac{a}{2}(N-1), \frac{b}{2}(N-1)) \pmod{N}$ のとき
 分岐することを示せばよい。 $N > |2c-l_1|$ とすれば, 変数 τ
 が $\sqrt{-1}$, $\sqrt{-1}+1$ を 1 まわりするとき, $u_1(\tau)$ は $u_1(\tau) + 2c-l_1$ にう
 つることより, $\frac{1}{N}(u_1(\tau) + a\tau + b)$ は $\frac{1}{N}(u_1(\tau) + a\tau + b + 2c-l_1)$
 にうつる。このとき, $(a, b) \not\equiv (a, b + 2c-l_1) \pmod{N}$ となるの
 で題意は示された。 //

予想 $|2c-l_1| = 1$

この予想が示されるのは, 次のことが得られる。

- u は Γ に対する weight -1 の無限多価 *semi-entire modular form* である。
- $N (\geq 2)$ なる任意の整数に対して, ϕ_N は Γ に対する weight 2 の N^2 価 *semi-entire modular form* である。
- $N (\geq 2)$ なる任意の整数に対して, 多項式 $\phi_N(X, \tau)$ は $\mathbb{Z}[15G_4(\tau), 35G_6(\tau)][X]$ 上既約である。

今のところ, 多価な *modular form* が何の役にたつかは, 考
 えていないのでわからないが, 有限多価となる N よりも,
 無限多価となる u の方が, 得るものが多いように思われる。

参考文献

- [1] J.W.S. Cassels, A note on division values of $\wp(u)$,
Proc. Cambridge Philos. 45 (1949), 167-172
- [2] M. Eichler, D. Zagier, On the zeros of the Weierstrass
 \wp -function. Math. Ann. 258 (1982), 399-407
- [3] M. Eichler, D. Zagier, The Theory of Jacobi Forms,
Progress in Math. 55. Birkhäuser (1985)
- [4] H. Ohta, 多価 modular form について (zero-division
value の定義), 1985年度学習院大学修士論文
- [5] B. Schoeneberg, Elliptic Modular Functions, Springer
(1974)